懐かしさを感じる街を歩くための事前学習の記録
―門司港レトロ、豊後高田「昭和の町」、別府温泉郷を事例として―

香川貴志*1

Record of Prior Learning for Walking around Three Nostalgic Towns:
An Example of Mojiko-Retro, *Showa no Machi* in Bungo-Takada, and Beppu Hot-Springs

Takashi KAGAWA

抄　録：本稿は、筆者が隔年で担当する学部前期集中科目「地理学研究」（毎年開講する大学院前期集中科目「人文地理学特論」と現地実習は共通）の事前学習会の成果をまとめたものである。現地行動の対象地域である門司港レトロ、豊後高田「昭和の町」、別府温泉郷に関する比較的新しい論考 60 本を、受講生 14 名（学部 13 名、大学院 1 名）と筆者（香川）が分担して精読し、その要旨を整えて本稿を編み上げた。その原稿は、参加者全員の共有財産となり、現地行動の際に活用された。同様の野外実習をこれらの地域で行う場合、本稿は最も優れた参考資料の一つとして利活用されるであろう。

キーワード：事前学習、文献研究、書誌情報、門司港レトロ、昭和の町、別府温泉郷

Ⅰ．はじめに―野外実習を有意義にするために必要なもの―

京都教育大学では、いくつかの科目において集中開講のスタイルで野外実習が実施されている。2 単位 30 時間の場合であれば、1 日 5 コマ設定でも現地実習に 3 日を費やすので、必然的に前泊と後泊を要することとなり、受講生の経済的負担が重くなってしまう。そこで、筆者の担当で奇数年に実施している「地理学研究」と偶数年に実施している「地理学特講」（ともに毎年開講の大学院「人文地理学特論」と現地実習を共通実施）では、事前学習の時間枠を設けて、現地実習の対象地域に関わる文献紹介をゼミ形式で行ってきた。

こうした文献紹介は、集められる文献の数と受講生の数によって一人あたりの担当論文数が左右される。これまでの経験を顧みると一人あたり 2～5 本を担当するケースが多い。この担当論文数は、受講生の多くが 3 回生であることを踏まえると適量だと考えられる。また、受講生の中に稀にいる 2 回生の場合は、本格的な学術論文を読了した経験を持たない者も珍しくない。したがって、受講生の専門分野を問わず、地理学や周辺領域の学術論文（エッセー的な啓蒙論文も一部に含まれる）と接する契機となる点で、文献紹介では「野外実習の対象地域を知る」という事前学習に留まらず、学術研究の基本ルールやマナーを学ぶ入門的な効用が期待できる。

*1　京都教育大学教育学部

卒業論文の口頭試問でも例年のように問題になるのが、文献渉猟が足りない、文献の読み込みが浅い、書誌情報の記載が不完全であるなど、基本的な学術論文のスタイルを踏襲できていないという諸点である。筆者が当科目での取り組みを始めてから多少の改善は認められるものの、このような習慣は経験を重ねて身につけていくしかない。そういう意味で、文献紹介という作業は、現地実習（フィールドワーク）に先立つデスクワークとして欠かせない営みといえる。文献を読み込むうちに、あるいは他の受講生の文献紹介を聴くうちに、そこで扱われている現地の様子に思いを馳せ、それを現地で見聞する実物と照合すれば、フィールドに立つことの喜びや楽しさが実感できるはずである。

Ⅱ．文献紹介の方法

今回の授業では、現地実習に計 10 コマ（20 時間）を割り振ったので、事前学習が 5 コマ（10 時間）必要となった。そこで受講者が確定した時点で、第 1 回事前学習会を 5 月 16 日（土）に 2 コマ（4 時間）、第 2 回・第 3 回事前学習会を 7 月 25 日（土）に 3 コマ（6 時間）設定した。これらのうち第 1 回事前学習会では、主に現地行動の行程と第 2 回・第 3 回事前学習会の進め方の説明を行った。したがって、文献研究の内容紹介は第 2 回・第 3 回事前学習会にゆだねた。

第 1 回事前学習会が終了してすぐに、筆者（香川）が検索条件を定めたうえで、CiNii を使ってピックアップした論文 60 編をリストにまとめて掲出した。論文をピックアップする際、キーワード指定による検索を施したが、3 か所の対象地域ごとに選定基準は若干異なっている。まず「門司港レトロ」については、検索キーワードを「門司港レトロ」として「発行年不問、原則的に 5 ページ以上」という条件のもとに選定した。「昭和の町」については、検索キーワードを「豊後高田」として「発行年が 2000 年以降、原則的に 5 ページ以上、ただし中心市街地活性化に関わる文献のみ」という条件で選び出した。また、文献数が多い別府については、検索キーワードを「別府温泉」として「発行年が 2000 年以降、ただしごく一部に別キーワードによる論文を含む、原則的に 5 ページ以上」の条件を定めて文献を選んだ。

受講生は、学部と大学院を合計して 14 名（学部 13 名は全員が社会領域専攻、大学院 1 名は教科教育専攻社会科教育専修）だったため、一人あたりが担当する論文は 4 本となった。短いものだけが先着順で読まれないよう、論文ページ数の長短で 4 つのカテゴリー（A、B、BC、C、K）に分けた。そして、A から 2 編、B または BC から 1 編、BC または C から 1 編を事前学習会で紹介させた。筆者（香川）が紹介する論文は K カテゴリーとしたが、これらはページ数が 5 ページ未満のものが 1 本、22 ページ以上のものが 2 本、論文リスト掲出時に印刷中であったものが 1 本である。

第 2 回・第 3 回事前学習会における文献紹介に先立って、すべての受講生にメール添付で文献紹介のためのテンプレートを送信配布した。このテンプレートは後掲する文献要旨とほぼ同様の様式で、各文献の書誌情報を Reference、キーワードを Key words、要旨を Abstract として記入させ、これを事前学習会で発表させて質疑を展開した。書誌情報の必要事項は、第 1 回事前学習会および欠席者に対するフォローアップで伝達した。キーワードについては、既に論文に掲出されている場合はその流用を認めたが、受講生から提出されたシート上に「CiNii で文献検索を

した際の検索キーワード」が含まれていれば、それを後掲の Key words から省いた。これはキーワードの重複を避けるための措置である。

また、文献要旨については、上限字数を 200 字とした。これは論文の内容をコピー&ペーストしたような無駄に長いレポートを排除する、少ない字数で要点をまとめられるようにするなどの狙いによるものである。なお、本稿付録の文献要旨は、受講生から提出されたシートを筆者（香川）が熟読して、従来の経験（香川：2013, 2015a, 2015b）に立脚しつつ微調整を施している。

集まった文献要旨のシートは第 2 回・第 3 回事前学習会のあとで電子媒体での提出を求め、これを第 2 回・第 3 回事前学習会に出席できなかった者、大学院からの受講生に対し、それぞれ地域別（門司港レトロ、豊後高田、別府）、著者の 50 音順に並べさせた。それらの中で最も出来栄えが良かったものを選び、そこに筆者が加筆修正を施して合本したものが付録とした文献要旨の原版になっている。この文献要旨は現地実習（香川：2016）の初日に受講生全員に配布した。

Ⅲ．文献要旨をまとめる意義―本文のまとめに代えて―

コンパクトにまとめられた文献要旨は、当該地域で調査を立案・実施する場合に少なからず参考になる。数年のインターバルを開けて同様の文献要旨を作成すれば、本稿で取り上げた時期以降に実施された研究の特徴を洗い出すこともできる。さらに、今回の実践のようにキーワードとページ数の条件だけで文献を抽出した場合、狭い研究領域だけでなく周辺領域の研究成果を広く集められる。とりわけ幅広い視点が求められる地理学的な観点に立った地域調査では有効な事前準備方法のひとつになり得る。

現状では、受講生が文献を読み込んでそれをまとめるための時間を確保することに力点を置いており、文献検索は授業担当者である筆者が行っているが、本来ならば文献検索の段階から受講生に任せるのが本筋であるのは言うまでもない。ただ逆に、文献の整理や管理がし難い、取り組みの遅い者が早い者の足を引っぱってしまうなどの懸念があり、いまだ実践には至っていない。

いずれにせよ「読む」と「書く」という行為が研究の基盤であることに疑いを挟む余地はない。これらを課題として同時に与えられるという利点を大切にして、今後一層の改善を図りながら、当面は同様の方法で受講生の能力開発に取り組んでいきたい。

文　献（対象地域に関する論文は次頁からの付録を参照のこと）

香川貴志（2013）「東日本大震災を受けての防災教育普及のための取組―さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証―」，京都教育大学紀要，123，pp. 31-45.

香川貴志（2015a）「阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える（第 1 報）」，京都教育大学環境教育研究年報，23，pp. 7-15.

香川貴志（2015b）「阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える（第 2 報）」，京都教育大学環境教育研究年報，23，pp. 17-25.

香川貴志（2016）「レトロを基軸にした地域振興へのアプローチ―2015（平成 27）年度「地理学研究」の覚え書き―」，京都教育大学教育実践研究紀要，16，pp. 1-10.

付録 Appendix

「門司港レトロ」をキーワードに含むもの（発行年不問，原則的に5ページ以上，著者氏名50音順）

Reference：岩武光宏（2014）「地方都市における地域再生の歩み―北九州市（門司港レトロ事業）を事例として―」東京交通短期大学研究紀要 19, pp.121-133.
Key Words：地域経済，財源調達，財政依存，行政主導，地域主導
Abstract：現在の日本における地域社会は，自律的な発展を模索することが求められている。北九州市の門司港レトロ事業の特徴は，財源調達にあり，国からの補助金や起債でまかなわれたものが多い。これは，自己負担の少なさとも，財政依存体質とも捉えることができる。成果については，観光と雇用の両面において地域経済へ与えた影響が大きい。今後は，行政主導による観光振興から，地域主導の観光振興への転換が必要である。

Reference：上田善浩（2001）「門司港レトロに見る官民一体のまちづくり―レトロ建築物や街並みを活用したまちづくり」アーバン・アドバンス 20, p.6 , pp.57-64.
Key Words：ウォーターフロント，産業遺産，都市型観光拠点，官民合同
Abstract：明治・大正期に栄えた九州一の陸海運・金融拠点たる産業遺産，変化に富むウォーターフロント，関門海峡という資源が「歴史的な街並みとウォーターフロントを活かした都市型観光拠点」として再生された。門司港の再活性化のため「門司港レトロ」をキーワードに1988年から都市型観光整備が始まった。ソフト面を中心とした観光振興を進める官民合同の門司港レトロ倶楽部も発足，3千万円の予算で1億円の効果を得た。

Reference：牛房義明（2012）「仮想評価法（CVM）による門司港レトロ景観の評価」北九州市立大学商経論集48-1, pp.35-48.
Key Words：仮想評価法，CVM，アンケート，景観，二段階二肢選択法
Abstract：本論文は，仮想評価法によって門司港レトロ地区の景観を貨幣で表示するようアンケート調査を実施した結果が記されている。結果，門司港レトロに訪れた人々の景観の評価は事業に費やされた事業費より低いことが分かった。ただ，その調査法には若干の問題点があり，調査方法の改善が必要である。さらに，事業により経済改善がもたらされたのかを確認するために，北九州市民にもアンケートを実施する必要がある。

Reference：中尾憲司（1996）「近代建築物を活かしたまちづくり―門司港レトロ―」日本都市学会年報 30, pp.27-32.
Key Words：歴史的建造物，観光客，大正ロマン，商店街
Abstract：戦後に衰退した門司港を元からある古い建物などを生かして観光を中心に開発した経緯が記されている。また新しい施設を導入して，海外との交流も深めるような活動も見られる。課題としては，このまちづくりは主に自治体中心に観光メインで進められており，レトロ地区には多くの観光客が訪れるようになったが周辺商店街には期待するほど人が流れておらず，今後は市民との連携を深め共同でまちづくりを進める方針である。

Reference：中野恒明（1998）「門司港レトロ地区（北九州市）に10年関わって―中野恒明さんに聞く―」月刊観光 380, pp.30-36.
Key Words：エイジング，レトロプロムナード，観光客，まちづくり
Abstract：事業開始当初は，さまざまな局部に分けられ，縦割りで動いていた。レトロプロムナードの評判がよく，他の局からも依頼が来るようになり，理解が広がった。観光客等の階層をターゲットにするのではなく，市民の方にとって住みよい環境がふさわしいと思い，この考えに至った。地元に根付くことを考えた。新しいものを作るだけでなく，既存の物も大切にして，いいまちを作ることを忘れずにいて欲しいと願っている。

Reference：日経コンストラクション編集部(1998)「門司港レトロ事業―『本物志向』で長くもたせる―」日経コンストラクション 211, pp.60-64.
Key Words：本物志向，メンテナンス，御影石，レンガ壁
Abstract：古びるほど味わいが滲む街をめざし，北九州市は「メンテナンスのコストは出せない」という条件のもと門司港レトロ事業を行った。「本物志向」という一貫した方針によるだけあって，開発から10年近く経った今でさえ，大規模なメンテナンスはほぼ不要である。大正時代の護岸の石舗装，路面電車の敷石に使われていた古い御影石，倉庫のレンガ壁を再利用したことで，材料費の節約だけでなく味わい深い仕上りが得られている。

Reference：萩原　貢（2000）「門司港レトロの事業について」地域文化研究 15, pp.左7-16.
Key Words：補修工事，煉瓦壁補修，時間の痕跡，歴史性
Abstract：明治・大正・昭和初期と，時代ごとに最先端の建物が建てられ，当時の賑わいは門司港繁栄の象徴といえた。しかし戦後に大きく変貌した。行政サイドでは観光事業を発案，様々な事業を「門司港レトロ」と称し，地区再生を図った。補修工事は「基礎工事」「煉瓦壁補修」に分けられた。復元の計画では，「時間の痕跡」として，完全に修復はせず，新しい部分と古い部分を対比することで歴史性を強調した。

「豊後高田」で検索できるもの（発行年が2000年以降，原則的に５ページ以上，ただし中心市街地活性化に関係する文献に限る，著者氏名50音順）

Reference：安東洋義（2004）「シリーズ中心市街地活性化 豊後高田“昭和の町”活性化基本計画―地域文化の再生と創造による共感できるまちづくり・賑わいづくりを目指して―」新都市 58-8, pp.56-60.
Key Words：昭和の町，活性化，大型店，商店街，観光資源
Abstract：本論文は，大型店との競争に敗れたことで衰退した豊後高田市の商店街を復興させるために「昭和の町」として活性化していく計画が記されている。そこで，昭和の町の取り組みを行う商店街を活性化の中心軸として，商業や観光等といった各機能に目標設定している。これからは昭和の町を観光資源として捉え，顧客による滞在時間の延長と経済効果が図れるような施策展開の試みが記されている。

Reference：生野修二（2006）「地域活性化への途 お帰りなさい，千年の仏国・昭和の町へ―豊後高田市―」信用保証112, pp.88-92
Key Words：仏の里，昭和の町，昭和の店，昭和ロマン蔵，ご案内人
Abstract：宇佐神宮弥勒寺の僧侶の修行場とされた国東半島にある豊後高田市には，見事な文化財や奇岩奇峰がある。豊後高田の山あいにある文化財や奇岩奇峰紹介することで，豊後高田は仏の里であることがおさえられている。また，豊後高田の発展・衰退の理由，これらの過程での苦心が流れに沿って書かれている。そして，「昭和の町」づくりの具体的な取り組みについて述べ，最後に店舗ごとの質の差などの課題を挙げている。

Reference：板井　浩（2007）「豊後高田『昭和の町』づくり計画―『昭和の町』を核とした商業と観光の一体的振興を目指して―」地域開発 512, pp.36-41.
Key Words：中心市街地，商店街再生，既存商店街，昭和の町，地域住民
Abstract：豊後高田市の中心商店街は，川の東西に分かれ，昭和30年代から衰退していった。15年前の商店街再生の構想を契機として，昭和30年代の姿を残す既存商店街を観光の素材として活用するコンセプトが確立した。事業では，段階的に昭和の町を再生していき，拠点施設もつくった。また，質の維持も図っている。課題と今後の目標は，地域住民と観光客の双方への対応，東側商店街の発展，滞在型観光への移行である。

Reference：おおいたの経済と経営編集部(2004)「昭和の町への挑戦―豊後高田市中心商店街の現状と課題について―」おおいたの経済と経営 167, pp.1-5.
Key Words：少子高齢化，中心商店街，昭和の町，観光客
Abstract：豊後高田市は少子高齢化の進展とともに人口減少，核家族化が進む町である。商店数は減少傾向

にあるが，周辺に大型商業施設が増加したため，市内の売り場面積は増加している。市の中心商店街再生を願う人たちの努力により，昭和の町として商店街を整備した。この昭和の町には年間20万人を超える観光客が訪れ賑わいを見せているが，ハード面の整備や受け入れ体制，地元客を呼び戻すことなど多くの課題を抱えている。

Reference：金谷俊樹（2014）「豊後高田『昭和の町』物語―犬猫商店街に奇跡が起こった！」地域と経済 7, pp.37-48.
Key Words：犬猫商店街，地域住民，まちづくり，観光客，生活客
Abstract：タイトルの通り，犬や猫しか通らないと言われた商店街が，失敗や試行錯誤を繰り返しながら再生していった軌跡を述べた講演録である。ここでは地元住民が積極的にまちづくりに関わり，試行錯誤した様子が細かく語られている。まちづくりにおいて，究極の理想は，観光客と生活客がすれ違っても違和感のない，観光客のウケだけを狙うのではない，そんなまちづくりをすれば，100年持つ町になると述べている。

Reference：桑原茂彦（2007）「中心市街地の再生に向けて－認定基本計画の取り組み 豊後高田市中心市街地活性化基本計画『にぎわいと憩いの創出で愛されるまちなかへ』－」新都市 67-11, pp.138-145.
Key Words：昭和の町，再生，玉津地区，商業統計，中心市街地活性化
Abstract：本論文は，豊後高田市の中心市街地を昭和の町として再生し，それによって平成15年度に20万人以上の観光客が訪れるようになったことが記されている。一方で，栄えた商店街は偏りがあり，商店街間での格差が懸念されたり，市街地の整備事業の実施数が少なかったりと課題が数多ある。そこで，商業統計データ等を用いた分析をおこない，活性化のための事業の実施を着実に進めていく必要性があると著者は述べている。

Reference：小宮裕宣（2007）「豊後高田発 昭和三〇年代がいま甦る」myb 17, pp.26-31.
Key Words：昭和百年祭，昭和の町，一店一品，一店一宝，修景事業，商人再生
Abstract：「豊後高田に資料館を作りますので，館長として，商店街活性化の核となってほしい。」と，金谷俊樹氏からお誘いを受け，その後に何度も訪問を受けた。しかし，家庭の事情で当時は行くことが出来なかった。娘の容体が良くなってから，豊後高田へ行くことを決意した。高田に来るお客の数は年々増えていった。「一店一品」「一店一宝」「修景事業」「商人再生」の４つをコンセプトに「商店街活性化」に突き進んでいる。

Reference：小山田隆信（2009）「まちづくりに必要なものは何か―豊後高田市と高山市の例に学ぶ―」星辰 74, pp.21-25.
Key Words：町並み再現，官民一体，まちづくり，地元住民
Abstract：この二つの都市におけるまちづくりに共通するのは，自治体だけでなく，地元商店や企業が積極的に関わって，大きな約割を果たしていること，すなわち官民一体のまちづくりだということである。また，地域活性化とは観光地化が目標ではなく，地域を再活性化することが目的なので，何よりも地元住民が住みやすい町でないとならない。

Reference：近藤　毅（2012）「現地報告 商業と観光の一体的振興策『豊後高田昭和の町』の取組み」地方議会人：未来へはばたく地方議会 7, pp.41-45.
Key Words：地方議会，商店街再生，商業，観光
Abstract：昭和30年代をテーマとした商店街再生プロジェクトがスタートし，商店街の街並み修景事業などの活用により，当初は10店舗の改装から“昭和の町”づくりが始まった。“昭和の町”では，その基本コンセプトとして4つの再生を掲げているが，その基盤となるのは地元居住者のための商店街維持に加えて，その商店街が観光客誘致にも貢献できるような市街地再生事業である。

Reference：佐々木真治（2004）「豊後高田『昭和の町』づくりについて―商業と観光の一体的な振興をめざして―」日本不動産学会誌 18-2, pp.62-67.
Key Words：昭和の町，建築再生，歴史再生，商品再生，商人再生

Abstract：本論文では，高度経済成長期以降に衰退した豊後高田市の商店街が「昭和の町」をテーマにした町づくりにより，観光地として奇跡的な復活を遂げた過程が論じられている。さらに，その奇跡の継続と発展のために必要な部分について言及している。真の意味での「昭和の町」の実現のために必要な，商業地として充実，「人」の魅力のある町づくりなど，昭和30年代の町づくりによる奇跡を継続・発展させる方向を述べている。

Reference：佐藤快信（2011）「商店街の活性化と観光地化に関する一考察」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要 9-1,pp,7-14
Key Words：商店街活性化，昭和の町，日田市豆田商店街，島嶼部商店街，観光
Abstract：本論文では，商店街再生を基盤とした地域活性化の成功例として，豊後高田や日田の商店街を取り上げ，長崎県の島嶼部との比較を展開している。島嶼部では，安易に観光に依存することなく地元定住消費者のニーズに応える地元密着型商店街を強化しつつ，地元商店街主たちが観光関連産業に関わることが重要である。そのため，外部資本による大型店舗の誘致は控え，地場産業としての商店街を保護していく施策が必要である。

Reference：産業立地編集部（2005）「地域の話題を訪ねて（第２回）大分県豊後高田市・富山県高岡市」産業立地44-4，pp.63-69.
Key Words：昭和の町，観光客，総括的マネジメント，地域ブランド
Abstract：昭和の町は，郊外の大型店に頼るコバンザメ的発想に「NO」と唱えたことから始まる。商店街の個性を引き出す街づくりは自らがアイデアを出さねばと地元の人々は奮起した。そうして昭和の町が成功し一気に年間20万人が訪れる観光地となった。この奇跡を継続していけるかに今後がかかっている。課題は地域ブランドとしての質の維持と個店ごとの質の維持である。どちらも統括的マネジメント主体の欠如に根差した問題といえる。

Reference：関谷　忠（2006）「地域のマーケティング～豊後高田『昭和の町』の研究～」別府大学短期大学部紀要 25，pp.31-43.
Key Words：地域マーケティング，昭和の町，中心市街地活性化，観光地域づくり，マネジメントシステム
Abstract：この論文では，地域マーケティングの視点から豊後高田市を多面的に見ていく。「昭和の町」は，地方圏における中心市街地活性化，観光地域づくりの成功事例として全国的な評価を受け，これまで国土交通省をはじめ各所から複数の賞を得ている。しかし，事業の取り組みに対する個店の「質」の充実率の低下が懸念されるなど課題も顕在化してきている。町を一つの経営体と捉えたマネジメントシステムを確立するべきである。

Reference：永松博文・瓦田栄三（2006）「対談 商店街振興と企業誘致の両輪が支える豊後高田市―『昭和の町』と大分北部中核工業団地を歩く―」産業立地 45-6，pp.3-8.
Key Words：商店街振興，企業誘致，まちづくり，昭和
Abstract：豊後高田市では，昭和30年代の商店街を再生すべくまちづくりに取り組んでいる。補助事業の活用，行政と商工会議所の出資により「豊後高田市観光まちづくり株式会社」を設立のうえ，事業推進を図ってきた。観光地化に成功して活力も高まったが，観光業では税収の増加はあまり期待できない。財政再建には，企業誘致を図る税制上の優遇措置，高速道路などのインフラ整備が不可欠で，経済基盤の強化が望まれる。

Reference：野田 良輔（2008）「地方における中心市街地の現状と『昭和の町』豊後高田市の取組み」地銀協月報 573，pp.11-19.
Key Words：バブル経済，中心市街地，商店街，中心市街地活性化法，投資抑制
Abstract：バブル経済崩壊後の地方の街は大きく縮小している。大分県内では，商店街の衰退により中心市街地の衰退という構図ができている。豊後高田市の活性化成功の要因は，課題の共有と議論の実行，大きな投資の抑制にあると思われる。一方で，活性化にかかる制度の課題として，協議会設置の前提，補助金の弊害，中央官庁の影響力の強さが考えられる。このような難点を踏まえたうえで活性化に取り組むことが必要

である。

Reference：久宗周二（2006）「既存資源を活用した観光開発の試案―豊後高田市の事例と八戸での試案―」産業文化研究15, pp.15-27.
Key Words：安土桃山時代，城下町，既存資源，観光客，観光開発
Abstract：豊後高田市は，人口わずか2万6千人の町であるが，「昭和の町」の整備が奏功して年間20万人に及ぶ観光客が全国各地から訪れている。当地は安土桃山時代に端を発する城下町であり，島原藩の飛び地となった江戸期の前期以降は年貢米を運ぶ港町としても機能し，他地域から国東半島への玄関口にあたっている。「昭和の町」に代表される様々な事業を展開し，地域活性化を図っている。

Reference：豊後高田市企画情報課（2012）「大分県・豊後高田市中心市街地活性化基本計画の概要」市街地再開発 512, pp.33-37.
Key Words：中心市街地活性化，再開発，達成状況，目標指数
Abstract：「目指すべき中心市街地の姿」を定めて基本方針を立案し，その実現のために3つの目標を掲げて事業を推進したアウトラインをまとめている。また，事業の達成状況を把握するため，目標指標及び目標数値を設定している。関係者が一体化して本計画に盛り込んだ事業を着実に実行し，さらなる中心市街地の活性化に取り組んでいくためのロードマップが提示されている。

Reference：牧野光朗（2002）「地域だより 大分発『まちおこし』から『まちのこし』へ―臼杵市，豊後高田市，別府市の街並み保存への取り組み―」日経研月報 294, pp.56-62.
Key Words：別府八湯，温泉文化遺産，まちのこし，価値基準，住民
Abstract：「別府八湯トラストシンポジウム」では「温泉文化遺産」をどのようにして後世に残していくかが話し合われた。まちづくりに成功した市に共通している点は，どのような町にすれば観光客が訪れるかという他人の価値基準ではなく，住んでいる人の価値基準で街を形成していくという意識であった。また，まちづくりには住んでいる人自身が街を作るということが必要不可欠であるという認識も確認された。

Reference：益田啓一郎（2007）「地図が教えてくれた商店街再生・豊後高田『昭和の町』―観光客で賑わう，ちょっと昔・昭和30年代をテーマにした街づくりの秘密―」地図中心 412, pp.34-37.
Key Words：中心市街地，ストリート・ストーリー，修景，昭和の町，
Abstract：抜本的かつ大規模な地域活性化計画を選ばず，地元の人々による地域調査に基づくボトムアップ型のまちづくりを実行していった豊後高田「昭和の町」の誕生までの経緯をまとめた報告である。地域調査の過程で使われた国土基本図や住宅地図などの大縮尺地図を随所で活用し，修景された商店街の写真も多数添えられている。観光客を呼び込むことで成功した商店街活性化の一つのモデルを理解できる簡潔な論考といえる。

Reference：松見達也・柴田 久・石橋知也（2009）「中心市街地活性化にむけたまちづくり交付金の有用性と管理運用上の課題に関する研究―大分県豊後高田市『昭和の町』の財政的事態に着目して―」都市計画（別冊 都市計画論文集）44-3, pp.679-684.
Key Words：昭和の町，大型店，まちづくり交付金，商工会議所
Abstract：豊後高田市は，大型店舗進出などにより商店街の衰退が進んでいた。そこで昭和の姿を残した町並みを生かし「昭和の町」のコンセプトのもと，活性化を実施した。県や市，商工会議所が積極的に連携して行われた活性化は，まちづくり交付金を活用した結果もあり空き店舗の減少や観光客の増加などの成果を収め，まちづくり交付金の有用さが証明された一方で，予算管理の難しさなどの課題が明らかになった。

Reference：松村 孝（2014）「地域性ガイドラインにもとづく景観創出手法によるまちづくり（景観創出型時代町）の可能性―伊勢，彦根，豊後高田の事例を中心に―」創造都市研究 9-1, pp.86-108.
Key Words：歴史的まちづくり，景観創出，時代町，地域性ガイドライン，アイデンティティ
Abstract：本論文は，歴史的景観を保存するのではなく，陳腐化した古い景観，失われゆく景観，失われた景観などを，地域文化や歴史を反映した遺産と考えて，その修景や改善を通じて積極的に町並み創出に繋げ

る取り組みを比較考察したものである。対象は伊勢「おはらい町」「おかげ横丁」，彦根「夢街道キャッスルロード」，豊後高田「昭和の町」である。いずれも単なる保存ではなく積極的な修景を図ったことが成功の鍵となった。

Reference：宮崎幹朗（2007）「大分県豊後高田市『昭和の町』に見る地域活性化策の展開と課題」地域創生研究年報 2，pp.78-87.
Key Words：地域活性化，まちづくり，中心商店街活性化，商工会議所，地域資源
Abstract：豊後高田市は昭和30年代を主題にまちづくりに取り組み，観光客数を増加させ，地域活性化の先進地の一つとして注目されている。その成功は地域資源としての「昭和の街並み」を利用したまちづくりを行ったため，単なる観光向けのものではなく「本物の昭和の商店街」による魅力を提供できた点にある。しかし，観光地化によって地域住民と商店街のギャップは広がっており，それが今後の発展のカギになる課題ともいえる。

Reference：山口泰久（2007）「『昭和の町』による観光・商業の一体的振興―大分県豊後高田市・草の根の社会起業家たち―」観光文化 31-3，pp.17-21.
Key Words：昭和の町，昭和30年代，商店街，地域振興
Abstract：戦後しばらくの商業都市としての賑わいを取り戻すべく，豊後高田市地元商店街が実施した「昭和の町」の取り組みは功を奏した。昭和30年代の商店街をコンセプトとした取り組みは，観光と商業の一体的な振興を図っており，建築，歴史，商品，商人の4つの再生を昭和の町公認の商店に求めている。しかし，急速に活気を取り戻した現在でも，店により客足が偏る，特定個人の力量に依存してしまうなど課題が惹起している。

Reference：用地ジャーナル編集部（2008）「自治体通信　小さくても“キラリ”と光るまちをめざして―大分県豊後高田市―」用地ジャーナル 17-1，pp.40-45.
Key Words：集約型都市構造，昭和30年代，商店街，再生
Abstract：集約型都市構造への転換に，人口2万6千人の小さな町が挑戦した。衰退していく商店街にかつての元気を取り戻そうと商業者・商工会議所・行政の３者が一体となり，最も華やかだった「昭和30年代」をテーマに再生を試みた。昭和の姿のままという“弱み”を“強み”へと転換させた結果，過去最高を年々更新する観光客が訪れた。商店街から地域全体へ活性化の波を広げていくという取り組みの決意が整理されている。

Reference：和田耕治（2008）「中心市街地活性化の新潮流―まちづくり，中小小売業の視点を中心に―」嘉悦大学研究論集 51-1，pp.1-15.
Key Words：改正中心市街地活性化法，まちづくり，中小小売業振興，地域振興
Abstract：2006年の中心市街地活性化法の改正により，多くの地域のまちづくりは混乱した。しかし，各地域が厳しい状況に置かれる中，賑わいを取り戻しつつある中心市街地を有している地域もある。こうした地域の成功は，行政の政策に頼るのではなく，地域の商業者・地権者などが地域の特性を考え，まちの経営資源を理解した上で，まちの方向性やコンセプトを議論し，着実かつ主体的な活動を続けて勝ち取った結果である。

Reference：DB Journal編集部(2006)「地域新発見 小さなまちの，ゼロからの挑戦―商業と観光の一体的振興を目指す豊後高田市―」DB Journal 24，pp.3-7.
Key Words：昭和の町，４つの再生，「ご案内人」制度，語り部，行政支援
Abstract：「商店街を潰すな」という思いから「豊後高田地域商業活性化委員会」が設立された。町の個性として注目したのが昭和の姿をとどめる商店街だった。まず建築・歴史・商品・商人という四つの再生に基づく店づくり，次に市民ボランティアが「語り部」として案内する「ご案内人」制度，この二本の柱を中心に据えて「昭和の町」づくりは進められた。商店主等の努力に加え行政支援があったことによって「昭和の町」は成功した。

「別府温泉」で検索できるもの（2000年以降，ごく一部に別の検索語によるものを含む，原則的に5ページ以上，著者氏名50音順）

Reference：入江秀利（1999）「江戸時代の別府温泉の記録（一） 地獄」別府史談 13, pp.114-124.
Key Words：地獄，海地獄，鉄輪地獄，地獄蒸し，無年貢地
Abstract：本論文は，江戸期の別府の地獄について書かれた日記，紀行文，文書をまとめたものである。地獄について書かれた文書の本文があり，それに筆者が当時の様子や文章を書いた人物の説明を足していく。内容としては当時の地獄の外見的な様子や言い伝えから地獄蒸しの方法，地獄によってもたらされる農業への被害について書かれており，江戸時代の地獄の様子がよく分かるようになっている。

Reference：入江秀利(2000)「温泉―江戸時代の別府温泉の記録(2)」別府史談 14, pp.132-151.
Key Words：和漢三才図会，石風呂，貝原益軒，豊国紀行，蝶亭起友
Abstract：別府村の温泉は江戸時代の『和漢三才図会』の記事で初めて全国的に紹介された。元禄時代に訪れた貝原益軒の『豊国紀行』や俳人蝶亭起友の『温泉めぐり』等にも別府温泉の記録が残り，石風呂や砂湯など温泉の特徴が細かく記されている。熱湯で入浴できず蒸風呂にして乾浴を要する場所もあったため，石風呂が創設された。伝承では一遍上人が創設したとされる石風呂は，国重要有形民俗文化財に指定されている。

Reference：浦 達雄（2002）「新『別府温泉』への私の提言」別府史談 16, pp.25-34.
Key Words：泉質，町づくり，街づかい
Abstract：世界の泉質11種中10種がある別府は温泉天国である。しかし各地の温泉地同様に景気の低迷で苦境にある。我々は安易に行政に依存しがちである。そろそろ自前の力で「出来ることから始めよう」というのが私の提唱である。これからは「街づくり」という開発型ではなく，あるものを有効に生かす「街づかい」が必要である。観て，食べて，浸かって楽しくゆったりできるそんな街を目標に，別府には歩み続けてほしい。

Reference：浦 達雄（2003）「別府温泉郷における街づくりの動向」温泉地域研究 1, pp.23-28.
Key Words：温泉観光地，別府八湯，街づくり，イベント企画，地域通貨
Abstract：日本の温泉地は，小規模な温泉地が着実な進歩を遂げてきたのに対し，歓楽型の温泉観光地は温泉地全体が停滞・減少傾向を示している。長期低落傾向の別府温泉郷では，新しいタイプの街づくりにおいて，1996年から続けてきた研究会や諸活動の成果を活かしている。また，「別府八湯トラスト」や地域通貨発行などの新しい動きがみられ，関連産業も芽生えつつある。この事例は全国の温泉観光地に今後の方向性を示している。

Reference：浦 達雄（2004）「別府温泉郷における旅館経営の動向」観光研究論集 3, pp.1-12.
Key Words：温泉地，旅館経営，ポスト・バブル
Abstract：別府温泉郷では，1973年の石油危機を契機に，周辺部から旅館業の停滞が始まり，バブル経済崩壊後は，核心部においても老朽化やサービス低下など，旧態依然とした旅館経営が不振で旅館経営に工夫を要する。規模別にみると，大規模旅館ほどエージェント（代理店）に依存し，都市ホテル的機能の充実を図るケースが多く，小規模旅館では，露天風呂や食事処などの導入により，旅館としての個性化・専門化を目指している。

Reference：浦 達雄(2005a)「別府温泉における旅館業の立地と経営形態の変化」観光研究論集 3, pp.1-12.
Key Words：温泉地，旅館業，立地変動，経営形態
Abstract：別府温泉における旅館業の立地変動と経営形態の変化について旅館経営者の系譜，立地状況と変化に視点を当て実態を追究した。江戸期の別府は素封家や先住者による旅館経営が中心であったが，明治中期以降，立身出世の外来者による旅館経営が増えた。戦後はこれに加えて海外からの引揚者も参入して別荘の旅館化が進んだが，企業家の旅館経営者，小規模旅館の多店舗化など時代による変遷を指摘することができる。

Reference：浦　達雄（2005b）「別府温泉郷における旅館経営の変容」温泉地域研究 4,pp.17-28.
Key Words：温泉地，別府八湯，旅館経営，旅館
Abstract：ポスト・バブル経済期においては，旅館の転職・廃業や経営者の交代，ビジネスホテルの開業や貸間旅館から和風旅館への転換などが進んでいる。今後は，日本では稀と思われる総合的な温泉リゾートの方途を目指すべきである。別府八湯を構成している個性的な温泉地が相互にネットワークを形成することで機能分担を図り，独自性を保持することで，温泉観光地としての再生，活路開拓の方向性が見いだされるのである。

Reference：浦　達雄（2005c）「別府温泉郷における観光客の動向」大阪明浄大学紀要 5, pp.13-26.
Key Words：観光客，旅行目的，観光行動，交通事情，別府温泉郷
Abstract：観光客の年齢層は20歳代が最も多く，平均年齢は30歳半ばであった。同行者は，家族，友人・知人，夫婦・同伴が多いことがわかった。旅程は1泊が多くみられた。別府温泉郷では日帰りが最も多かった。別府温泉郷の評価は風景，温泉の印象が強く，交通事情，買物施設などの評価は低かった。観光客は別府に対して温泉地としての情緒を求め，露天風呂めぐりや，そぞろ歩きが楽しめる温泉街を期待していることがわかった。

Reference：浦　達雄（2005d）「近代における別府温泉郷の形成過程」温泉地域研究 5, pp.1-12.
Key Words：人工掘削，観光化，別府港，土地区画整理
Abstract：別府温泉郷の形成は明治から昭和にかけてと，高度成長期の二つの時期に大きな変革が起こる。前者では，別府港の竣工から始まり，人工掘削技術により温泉の開発や土地区画整理などにより観光地化が進んだ。大正期に入ると，海岸埋立地開発などの土地開発が進展するとともに，外来資本による地獄めぐりの整備などが行われ，別府温泉郷トータルでの観光地化が進んだ。

Reference：浦　達雄（2006）「高度経済成長期における別府温泉の形成過程」温泉地域研究 6, pp.21-30.
Key Words：温泉地，別府法，高度経済成長期，観光ブーム，やまなみハイウェイ，別府国際観光港
Abstract：第二次世界大戦後の別府国際観光温泉文化都市建設法（別府法）を契機として，別府温泉郷が飛躍的に発展した。別荘の旅館化，旅館の大規模化，交通機関の発展による旅館の移動などが相まって，海辺から山腹に至る地域に多様な温泉が分布する別府は，こうして空間的拡大と景観変化を遂げた。この間，観光客の属性をみると，職場団体の減少，鉄道から航空機や自家用車へ利用交通機関の変化などが明らかである。

Reference：浦　達雄（2008a）「別府温泉における和風旅館の経営動向」大阪観光大学紀要 8, pp.1-8.
Key Words： 和風旅館，意欲的経営，料理旅館，地産地消，機能分化
Abstract：別府温泉における和風旅館では，源泉のかけ流しや料理などで個性や価値を創出している他に，新しい宿泊プランの導入やランチ営業の開始など意欲的な経営も実践されている。多くの旅館が経営上苦戦を強いられている中，和風旅館には「和」に対する拘りが大切なものとなる。施設・サービス・雰囲気などで日本文化に対する専門店という側面を強化すれば，洋風化する現代日本において存在意義は大きいものになる。

Reference：浦　達雄（2008b)「別府温泉郷における行政の観光地域づくり」温泉地域研究 10, pp.53-62.
Key Words：別府温泉郷，温泉地，観光行政，観光地域，地域づくり
Abstract：別府温泉郷の観光地域形成は，明治初期から昭和初期，高度経済成長期の2つの時期に大きな変革がみられる。第二次世界大戦直後の別府では，別府法という法律により観光港とやまなみハイウェイの整備などの広域観光ルートの形成が図られた。高度経済成長期には海岸の埋立て工事，区画整理など住宅地と商業用地としての開発が進んだ。民間によるまちづくりが進展したのは21世紀に入ってからであり，稀な地域事例といえる。

Reference：大山琢央（2014）「鳥瞰図に描かれた別府温泉―近代ツーリズムと吉田初三郎らのまなざし―」史学論叢 14, pp.123-140.

Key Words：近代ツーリズム，景観，吉田初三郎，鳥瞰図，別府温泉郷，別府湾
Abstract：近代ツーリズム期に描かれた吉田初三郎作品を中心として鳥瞰図の特色を分析し，別府温泉郷の景観イメージを考察している。明治時代後期までの黎明期を経て1920年代には別府温泉は発展期を迎えた。時代の変遷の中でも別府を描いた鳥瞰図には海側から別府の町が描かれ，海上に大きく船の姿が描かれているが，初三郎は唯一山側の視点で別府の鳥瞰図を描いており，様々な人々の視点で明確に描き分ける工夫が見られる。

Reference：奥田憲昭（2005）「大分県の文化観光と別府温泉」コミュニティ総合研究 2，pp,26-56.
Key Words：文化資源，文化観光，温泉観光，団体客，女性客
Abstract：大分県内で圧倒的多数の観光客を集める別府温泉において，観光客数やその諸属性の変化を明示し，慰安旅行の減少，修学旅行のあり方の変化，旅行のプライベート化，女性観光客の増加，中高年旅行者の増加などを突きとめた。そして，一層の地域活性化のために，都市型リゾートとしてのイメージ創出，団体客の吸引，女性客へのアピール等，放置すれば衰退を招きかねない別府温泉に対して様々な施策の提言がなされた。

Reference：菅野剛宏（2005）「明治期における温泉宿の広告一『新撰文語温泉誌』から」民具研究 132，pp.25-29.
Key Words：広告，内湯，娯楽性，湯治
Abstract：本論文は，湯治の広告をもとに明治後半の温泉について述べたものである。旅館の広告には温泉の効能だけでなく，内湯の完備や庭園があるなどの旅館そのもののアピールがあり，単なる湯治のための宿泊施設から観光的な場所へ変化を示している。この時期以降，別府温泉には娯楽として別府を訪れる観光客が増え，昭和には歓楽街が出来るなど，湯治の時代から別の場所へと変化していったことがわかる。

Reference：中山昭則（2003）「大正期における別府温泉の別荘地開発」温泉地域研究 1，pp.17-22.
Key Words：温泉地，分譲地，別荘地，田園地区，大正期
Abstract：別府温泉では，大正期に温泉資源を活用した別荘地開発が行われ，分譲地として販売された区画がその後の市街地形成に大きな役割を果たしてきた。その中でも，市街地から離れて「田園地区」として売りだされた荘園地区は，周辺地区が市街地化していく段階において別荘分譲の街区を拡張する形で開発がなされてきたため，狭い路地の多い別府市街地の中では，その整然としたたたずまいが資産価値と人気をともに高めている。

Reference：中山昭則（2005）「別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合」温泉地域研究 5，pp.13-22.
Key Words：温泉，地獄巡り，遊覧観光バス，観光開発，別府温泉郷
Abstract：別府観光の目玉商品である「地獄巡り」は，油屋熊八による「ガイド付き遊覧観光バス」との係わりで語られることが多い。観光などの余暇活動に対して厳しい目が向けられてきた時代背景もあり，昭和13年（1938）に油屋熊八は「別府地獄遊覧組合」の設立を果たし，今日の別府観光の主要コンテンツである「地獄巡り」の礎を築くことに成功した。これらの経緯が地域開発史として整理されている。

Reference：中山昭則（2010）「別府温泉郷における地域資源活用の軌跡と課題」別府史談 23，pp.51-69.
Key Words：別府温泉郷，観光開発，国内旅行ブーム，ボランティア観光ガイド，散策コース
Abstract：別府温泉郷は，その当時なかった新しい手法を取り入れた観光政策や，海外にも目を向けた活動により，大正から昭和初期にかけて観光開発が一気に進んだ。また，1950年代から国内旅行ブームがおこったことにより再び注目されるようになった。別府では，歴史が長いことを生かし，当時を知る人をボランティア観光ガイドとして任命し，多くの散策コースを提供した。

Reference：中山昭則（2013）「別府温泉郷におけるボランティアガイドの動向と課題」温泉地域研究 20，pp.119-128.
Key Words：別府温泉郷，ボランティアガイド，地域資源，街歩き
Abstract：別府温泉郷のボランティアガイド数は約8千人といわれており，稀なくらい多い。一方で，ガイ

ド組織の実態としてはツアー参加者のニーズを調べたり，各ガイドによって裁量が変化したりと課題が多いことが読み取れる。そこで，各ガイドの説明技術の向上を図り，ツアー客による説明技術の客観的測量方法の構築も考慮に入れ，参加者あってのツアーであることを再認識してガイドの育成を試みることが述べられている。

Reference：中山穂孝（2012）「別府市における外国人留学生の居住地特性」駒沢大学大学院地理学研究 40, pp.15-27.
Key Words：ニューカマー，オールドカマー，特化係数，生活空間
Abstract：本論文では，大分県別府市に居住する外国人留学生の国籍別居住分布と居住空間の決定に際しての，同国人，同郷者の影響を，前者は別府大学の資料から，後者を留学生へのアンケート調査から分析している。結果，前者は国籍，人口規模や流入時期によって相違が確認できた。そして後者は，留学生が日本語能力を取得しているため，同国人が近くにいることよりも大学と居住地との距離から決められていることが分かった。

Reference：中山穂孝（2015）「近代的温泉観光地の形成と都市開発―大分県別府市を事例に―」人文地理 67-2, pp.126-141.
Key Words：近代都市，都市開発，観光地理学，温泉観光，別府
Abstract：本論文は，明治期から昭和戦前期に焦点を当て，その間における別府の温泉観光都市化の経緯をたどり，市制施行後に実施された様々な観光振興策について整理と評価を試みた論考である。近代都市の研究が主に大都市を対象としている中で，基盤産業である温泉観光を軸に地方都市の変化と背景に光を当てたのがユニークである。産業史研究と都市史研究を繋ぐ研究の蓄積が観光地理学研究に寄与できることを実感できる。

Reference：松田法子・大場　修（2004a）「近代大規模温泉町の成立過程と大規模旅館の諸相―別府温泉を事例として―」日本建築学会計画系論文集 582, pp.145-152.
Key Words：近代，大規模温泉町，大規模旅館，別府港，湯治
Abstract：別府温泉は，近代に大きく発展した温泉地，温泉町の代表である。近代的発展第一の契機は別府港の築港およびそれに続く外湯の整備だった。また温泉町「別府町」の大規模発展の端緒は旅館の動向より伺うことができ，湯治型から観光型への変化は近代化の発展を示しており，それに伴い，大規模旅館の立地にも年次的変遷がみられ，多層型と邸宅型の思考の違いは経営者の社会的地位や方針により時代とともに変化してきた。

Reference：松田法子・大場修（2004b）「泉源開発と旅館街の立地傾向にみる近代大規模温泉町の成立過程―別府温泉事例として―」日本建築学会計画系論文集 582,pp.153-159.
Key Words：温泉町，泉源，旅館，共同浴場，外湯，近代
Abstract：別府温泉が近代に大規模な温泉町に発展したのは，豊富な温泉資源を背景とする活発な泉源開発が大きな要因として挙げられる。その結果，旅館立地の自由度は高まり，旅館街と温泉町それ自体の拡大が可能となった。時代の要請に対応した旅館街は，同時に多数の浴客を集客する大きな原動力になったとも考えられる。また，鉄道や港湾などの交通インフラも，多数の浴客を迎え得た重要な要因である。

Reference：八岩まどか(2010)「温泉地・温泉旅館の外国人旅行者の動向―別府温泉・蔵王温泉の対応―」レジャー産業資料 43-5，pp. 62-66.
Key Words：別府，蔵王，温泉地，外国人旅行客，温泉旅館
Abstract：外国人旅行客の動向について，大分県別府温泉と山形県蔵王温泉を比較考察したものである。温泉地を訪れる外国人旅行客は，日本に関する詳細情報の入手によって増加している。その推進力の根源の一つが旅ブログであり，初めて訪れる客だけでなく，リピーターも増加している。温泉旅館側は，言葉の問題や文化の違いによって生じる問題に不安を抱いているが，集客のための情報提供システムを作ることなどの課題がある。

Reference：由佐悠紀（2000）「別府温泉の年齢」大分県温泉調査会報告 51，pp. 1-9.
Key Words：別府温泉，BGRL井，カリウム濃度，
Abstract：大分県温泉調査研究会の活動のうち，別府温泉水系における継続年数の見積もりをまとめている。地下における温泉水の滞留時間の推定が可能になり，BGRL井におけるボーリング作業で得られた岩石試料中の異常に高いカリウム濃度から，別府温泉水系のこれまでの継続年数が約5万年と見積もられた。しかしながら火山地域に付随する熱水系の形成時期や継続時間などについては未だ研究はほとんど進んでいない。

Reference：由佐悠紀（2001）「別府温泉の生成過程と温泉資源の有効利用・保全」別府史談 15, pp. 24-34
Key Words：鶴見火山群，温泉，温泉資源，温泉水，温泉摂取量
Abstract：別府温泉は全て，鶴見火山群の地下に存在する食塩型の熱水から生じており，海岸に流れる過程で科学反応を起こして多種多様な温泉が出来上がっている。明治以降，温泉開発が進められ，現在では蒸気も含めた温泉採取量は一日当たり約五万トンに達する。これは一日当たりの温泉水の限界にほぼ達しており，温泉は別府の基盤をなすものであるので，温泉資源の保全をもっと身近な問題として考える必要がある。

【付記】
付録Appendixで列挙した文献については、書誌情報が重複するため文献表を作成していない。